リサイタルを終って

加古三枝子

去る五月十三日に、私は二十四年ぶりにリサイタルを開きました。実はこの年になって（三月二十二日で満六十五歳になりました）リサイタルをするなどということは夢にも思っておりませんでした。

しかし毎年ホームコンサートを致しておりますうちにだんだん調子が出て参りまして、お弟子さんたちからどうしてもリサイタルをするようにとすすめられ、一大決心をしたわけでございます。

しからば、二十四年間は何をしていたかといわれますと、主人の内助(?)、弱い子の育児と追われまして、私の出る幕は殆んどありませんでした。しかしこのままお婆さんになってしまうのがどうしてもがまんできず、何としても会を実現しようと思いました。

一年前から会場は予約したものの、プログラムの編成に頭を痛めました。

とにかくお金をとってみなさんに聞いていただく以上は、退屈な会にはしたくなかったのです。とは云っても、若い時とは違いますし、声の耐久力ということも考えなければなりません。

後から解ったことですが、この時に考えたプログラム

は、相当冒険的だったのですが、当日の会が終ってから、まだまだ歌える余裕があるのに気がつきました。

プログラムの前半はドイツリートにし、後半は日本歌曲にし、その中に、私の詩集「碧い部屋」の中からいくつかをどなたかに作曲依頼することにしました。

ドイツリートは、殆んで若い時のリサイタルで一度歌ったものでしたが、年をとってから歌いますと、全然違った味が出せるように思い、自分でも不思議なくらいでした。

私はヘルマン・ヴーハーペニッヒというドイツ人に若い頃ついておりまして、ドイツ語の歌といえば、必ずこの先生の指示に従っていたのですが、先生も亡くなられ、今や自分で勝手に解釈し、自由に歌えるようになりましたので、結果的にはかえってこのほうがよいように思われます。

日本歌曲の一番の冒険は、橋本国彦先生の「黴」を歌うことでした。音域が私の不得意な所であり、この種のドラマティックな歌は絶対に歌えないと若い時は思っておりましたので、これを何とか克服して自分のものにしたいと思い、あえて挑戦する意味でプロに組み入れました。それで練習の時はいつもこれを最初に始めました。当日の批評は、これが大へんよかったようで、これは大きな収穫だったと思っております。

「碧い部屋」の作曲は、最初は増本喜久子さんにお願いしたのですが、病気になられたため、柴田南雄先生にお願いしたら心よく引き受けて下さりほっと致しました。

詩の選び方は全くおまかせしましたが、自分が大きな声で歌うのには、ちょっと恥かしいのがあり、最初はとても勇気がいりました。

「桜台一丁目四十三番地」（これは私の現住所）という歌は、音域が二オクターブ半以上あり、この曲一つをマスターするのと、外の曲全部と同じくらいエネルギーがいりました。

伴奏の方にも話したのですが「多分アンコールはあると思いますが、たとえアンコールがなくても、こんなに苦労して勉強した桜台一丁目四十三番地ですから、私は絶対にもう一度ステージに出て行ってこれを歌います」といったくらいです。当日は予定通りアンコールにこれを歌い（アンコールの方がいい出来でした）柴田先生をもう一度ステージにおつれして、堪能いたしました。

私の詩には娘の抄子がしばしば出てまいります。この子

には非常になおりにくいてんかん発作があり、そのためにいろいろな障害がおきて、ふだんは厚木の寮で生活しておりますが、月に一回帰って参ります。

リサイタル当日に、もし抄子が会場におりますと、私はそのことが気になって充分歌えませんので、本人にはよく納得させて、来ないようにいっておきました。所が受持ちの先生が、いっしょに当日つれて行くといわれたらしく、「私、お母さんのリサイタルを聞きに行く」と電話をかけて参りましたので、これを納得させるのに、私の血圧は急上昇しそうでした。

結局、当日は先生だけ見えましたが、このような事情を御存知の方は、私の歌を聞いてみなさん涙ぐまれたようです。

歌詞の中にはコミックな所も沢山あり、聴衆の方が急に笑い出され、私は驚いて音程を間違えたり、メロディーがとぎれたり、とんだハプニングが起きましたが、柴田先生外二、三の方しか気がつかなかったようです。

主人が私のリサイタルに反対した理由の一つは、私の体の事を心配したためと思いますが、もう一つの理由は、自分に対するサービスがおろそかになると思ったのではないかと思います。

そこで私は主人にはっきり宣言いたしました。「練習のためにあなたのサービスの手をぬくということは絶対いたしません。歌の練習は一日に二時間以上は出来ないのですからいつでも遠慮なく帰宅してください」と。

「そのようにいってもらえると助かるなあー」と主人もいっておりました。

つまり背水の陣をしいての練習のようなもので、かえってこのため充実したのではないかと思います。

細心に計画して練習はしておりましたが、四月終り頃からどんどん血圧が上ってきました。ふだんから降圧剤はのんでいたのですが、病院へ行ってドクターストップをかけられたら大へんだと思い、勝手に薬を増量して、後二週間の辛抱といいきかせてがんばりました。

会がすんだ翌日、血圧は急降下しました。

娘の抄子とは、それから三日後の五月十六日から二泊三日の沖縄旅行をいたしました。一年前からの約束で、パパの運転するレンタカーで美しい珊瑚礁の海を満喫しました。

今回のリサイタルは、みなさんのおかげで（女高師・お

茶大と三十一年間の教え子たちが全国から集まって参りました）大へん成功いたしましたが、今後も健康に注意しながら、また開きたいと思っております。

＊　＊

（加古三枝子氏はソプラノ歌手。夫君は民俗音楽の研究に活躍されている小泉文夫氏。一九四〇年～一九七一年、お茶の水女子大学の講師をお勤めでした。リサイタルは、五月十三日、東京・イイノホールで開かれ、表現力に溢れ、気力のこもった歌唱で、多くの聴衆を魅了させました。なお、詩集「碧い部屋」は、昭和五〇年刊、私家版）

加古三枝子詩集「碧い部屋」より

ある問答

誰のために生きている？
抄子のために
抄子が死んだらどうする？
生きていても仕方がない
私が先きに死んだら……
後妻が門前市をなす（？）
どうしても長生きしなくちゃ

主人が先きに死んだら……
そんなことありえない（？）
いや　あり得るかも
いっそ三人飛行機にのって
不可抗力的に瞬間的に消えれば……
もうよしましょう　こんな馬鹿げた問答
何にも解らないのが人生です